

『比較文体論』紹介にあたって

—日本のヨーロッパ研究—

円 尾 健

序にかえて

さきに関西大学『文学論集』（第24巻4号）で『英仏比較文体論』（*Stylistique comparée du français et de l'anglais*）を紹介し、そのとき予告しておいたように引きつづき、A.マルブラン著『仏独比較文体論』（Alfred Malblanc, *Stylistique Comparée du français et de l'allemand*. Didier, Paris, 1968）を紹介論評するつもりであったが、その後この比較文体論がじつは比較文化論に他ならず、したがって単なる外国語学・文学研究上の内部的な一問題たるにとどまらず、文化一般に及ぶ大きな問題であることに気がつき、この機会に日本人のヨーロッパ文化にたいするアプローチのあり方を根本的に検討する必要に迫られたのである。

比較文体論の精神とその意義については先の紹介ですでにくわしく述べたのでここでは繰り返さないが、それは一口でいって「比較文化論をふまえた、反訳の科学化の試み」と定義することができるだろう。Le Monde紙の書評で注文して手に入れたのは筆者の渡仏以前であったが、本格的に取り組むようになったのは帰国後のことである。学部、大学院を経てこんどは教師と、いつの間にか10数年フランス語にたずさわり、この外国語についても何かわかったような錯覚を起こしていた時、たまたま機会を得てフランスにおもむいた。1年たらずの滞在であったが、その間ことばの厚い壁を思いしらされ、日本でよくいう「語学がよくできる」という程度ではどうにもならないものを痛感して帰国し、手にした『英仏比較文体論』はさらに追い討ちをかけるような形でショックを与えたのであった。

その時の、日本の研究の現状についての反省はすでに書いた通りだが、それまで「フランス語を読むことぐらいはできると思っていたが、本当はそんな気がしていただけではないか」と深刻な疑問におそわれたことをよくおぼえている。要するに、[外]国語というものが「文法の順にならべた、ただの単語の集団以上の何か」であり、「国民性のもっとも直接の表現である。……文法とは哲学である」（マダリアガ）とするならば、日本ではそれをせいぜい「文法の順にならべた、ただの単語の集団」ぐらいにしなかつたか、ひたすらその単語の尻を追っかけてきただけではなかつたかというのが筆者の卒直な感想であった。

いったい、どうしてこんなことになったのか？ さきの紹介でもそのことについて考えたつもりだが、全体として言語問題の内部にとどまっていたように思うので、こんどはもっと広い、文化的・社会的視野で根本から考察することにしたのである。

外国文化にたいする興味といっても、単なる異国趣味の段階ならどういうこともないが、専門研究として本格的に取り組むということになると——初級文法をそそくさと終えると、辞引を片手に専門書に飛びつき、それでわかったと称するごくお手軽な考えに立てば別だが——これは容易ならざる仕事だと今の筆者には思われる。ある座談会で、西洋史専攻の教授が「世界史だ、西洋史だというといかにももっともらしいが、実際はよく知らない外国を研究することなので」うんぬんと語っていたのが印象に残っているが、たしかに、外国についてあれこれいう前に自国のことを考えて見ても、知らないことやあやふやなことはいくらでもあるし、日本人の間でも同じ問題をめぐって見解が分れるのはべつに珍しいことではない。ロクに事情のわからない外国ならなおさらのことだ。いずれにしる、自国よりも専門とする外国にくわしいというのは、日本語よりも外国語に強いというのに似て何かの錯覚であろう。

『日本のアメリカ研究』という論文で、アメリカ学者の斎藤真は有名なトクヴィルのアメリカ研究を例に引いて、アメリカ研究は要するに「比較

研究に他ならない」ことを指摘して、その点、「日本のアメリカ研究者はもっと日本自体を知らなければならない」と述べている¹⁾が、それはわれわれフランス研究者についてもいえることである。とくに、桑原武夫先生がわれわれ学生に「フランス語の本ばかり読んでいてはダメだ」とたえず日本の現実から遊離しないよう説かれたのを想起する。

ただ、結局は比較研究だからといって、何でもかでも単純に比較したところで成功するとはかぎらないというのが、われわれ日本の研究者のおかれた厄介な立場というものであろう。同じヨーロッパを対象としても、ヨーロッパ人相互間の研究——たとえばフランス人のドイツ研究、イギリス人のフランス研究など——にくらべると、日本人のその場合、研究以前の問題が少くなく、それにもかかわらず必ずしもそれとは意識されてこなかったのではないかと筆者は現在考えている。

たとえば言語のレベルで考えてみよう。比較文体論をごく単純に受取った場合、専門とするフランス語を母国語の日本語と比較すればいちばん簡単で手取り早いはずだが、無反省にやったところで大して効果があがるとは思えない。2,3年前、名古屋の学会であるフランス人の講師が反訳について研究発表をするのを聞いたことがあり、内容はすっかり忘れてしまったが、その中でただ一つだけ《Le français est la seule langue qui soit assez précise pour rendre les imprécisions du japonais》という文章がなかなかうがったと同時に気の利いた表現として印象に残っている。これだけ異質なことばを単純に比較したところでひとりよがりな結論を引き出すぐらいが関の山であろう——少くとも研究の現段階では。

ところで、文化一般のレベルではどうか。これは、簡単に論ずるにはあまりにも大きな問題なので、最近の、この分野での注目すべき二冊の本²⁾にしたがって、ことばと文化の間に密接な関連があることを確認した

1) 『図書』(岩波書店・昭和46年)、10ページ。

2) 鈴木孝夫『ことばと文化』(岩波新書・昭和48年)。池田摩耶子『日本語再発見』(三省堂新書・昭和48年)。筆者の手にした範囲でこの2冊しか知らないが、この2冊の書物の提出した問題を抜きにして、将来の外国語学・文学の研究は考えられない。

うえて、フランス法と比較法学を専門とするある法学者が次のように基本的に重要な事実を指摘しているのに耳を傾けることにしよう。

……たとえば日本法とフランス法を比較してみますと、両者は構造的には非常によく似ております。似ているのがあたり前で、現在われわれが日本法といっておりますものは、明治維新ののちに、日本の近代化の過程で主としてフランス法とドイツ法とを手本にして、これにできるだけ似せて作った法です。ですからわれわれが現在日本法といっているものが構造的にフランス法やドイツ法に似ているということは理の当然なのであります。

ところが、これが実際に働いている姿をみますと、相互に非常に違うのであります。フランスでフランス法が働いているその姿と、日本でフランス法に非常に似ている日本法が働いている姿とでは非常に違う。そこで、いったいなぜそのように違うのだらうかということだんだん考えるようになりまして、結局これは、法をその一部とする文化全体の性格が違うということから生ずる、だから、法というものを一つの独立のメカニズムとしてそれだけ取り出して相互に真空の中で比較するということはあまり意味がないのではないか、ということに気がついたわけがあります。結局、法というものは文化の一部でありますから、したがって文化の全体からそれを切り離して比較したのではあまり実りがないのでありまして、もし比較するとすれば、文化的比較でなくてはならない。法を文化の一部として比較をする。だからそれは、法に焦点を合わせた比較文化論ということになるだろうと思います。……(傍点筆者)

(野田良之『日本人の性格とその法観念』。
雑誌『みすず』昭和46年4月号、3ページ。)

このような見地から論者は、それぞれの文化圏でのメンタリティの相違から国民性の比較に説きおよび、さらに西欧法の基本となるローマ法の考え方と日本人の法の考え方とを比較して興味ある議論を展開しているが、

以上の引用からでも、筆者のいう「研究以前の問題」が明かになれば幸いである。

ただ、このように筆を進めてくると、いかにも当然の、わかり切った常識のように考える向きもあると思うが、それは「コロンブスの卵」と同じ錯覚というものだろう。その“常識”が日本ではいかに常識でなかったかを、筆者はさきに紹介で主として外国語学習・研究に即して指摘し、本稿では、以下にそのよって来たる原因を探るつもりだが、参考までに、手元の雑誌『ふらんす』（昭和49年4月）に『なぜフランス語を学ぶか』という対談（小林正一丸山圭三郎）がのせられていて、その中にこういう対話がある。

丸山——フランス語を教えていて感ずることなんですが、学生が一番陥りやすいのは、日本語とフランス語は何でも1対1に対応しているという考え方ですね。ですから外国語を学ぶということは、今まで知っている概念や物に別のレッテルをはることだという風に考える。しかし全然そうではないんですね。

小林——それがいかんです。それじゃ何のために外国語を学ぶんだか分らない。（傍点筆者）

ここで話されていることが問題なのではない。筆者がすでにさきの紹介以来、何度も繰り返して指摘してきたことである。問題は、その事実が「学生は……」とまるで人ごとのように述べられていることである。これは少しおかしいのではないか。「学生が一番陥りやすい……」というのは、かれらが外国語、ひいては外国文化というものをそのようにごく安易に考えているということだが、それははたして学生だけの責任だろうか。かれらがそういう態度をみずから意識して撰択したのであるらうか。まさかそうではないだろう。

この、ごくお手軽な学習・研究態度は、いうまでもなく中学・高校、さらに大学と主として教室その他で学び取ったものであり、教師と学生が表裏一体の関係にある以上、学生がおかしいとすればそれは教師の反映であ

り、それはまた日本のヨーロッパのアプローチのしかたの反映ということになるだろう。そして、その意味で、“明治百年”とともにすでに1世紀を経た日本のヨーロッパ研究の総決算をそこに見るのもあながち間違いではないはずである。

現代日本は三重に時代の転換期——第一に戦後時代の終焉、次に近代日本の終焉、第三にいわゆる工業化社会の終焉——を迎えているというのがある政治学者の診断であり、それは正しいと思うが、そのうちでとくに、ヨーロッパに追いつくことを夢みてきた「近代日本」の終焉にあたって、われわれのヨーロッパへの姿勢を問い直すことは決して意義のないことではないだろう。これから、以上に考察した観点からヨーロッパ研究の現状を検討し、ついでその問題について考えることにする。

1

明治以来、日本人が外国、とりわけ西欧に寄せた関心は比類のないほど強烈なものであった。そしてその現れとしての外国語学習および研究、およびそれを通しての外国文化の輸入紹介はその後もうまずたゆまず続けられ、“明治百年”の現在、日本社会に堂々たる市民権を獲得してゆるぎない地位を占めるにいたったかに見える。その中の王者はいうまでもなく英語であり、まず国立大学文学部で国家的に保証された地位を確保しているのをはじめとして、公立・私立大学、さらには高校、中学と広大なピラミッドを築き上げていて、全国津々浦々にいたるまで英文科のない学校を探るのが困難なほどである。すでに世界語としての地位を確立した英語には及びもつかないが、フランス語、ドイツ語なども大学の文学部などを中心に、社会的に認められた確固たる地盤を獲得し、われわれのような者でも何とか養ってくれているわけである。

わが関西大学の、今年の入試の英語問題に「われわれは明治以来、外国語をたいへん熱心に学んできたが、そのために注がれたエネルギーはおびただしいもので、ときに大変な浪費ではないかと思われる」といった大変

皮肉な作文の出題があって、それを読んだ筆者は苦笑する他はなかったが、日本人の旺盛な英語熱には本国人もおどろくといわれる。他の国語についても、桑原武夫先生によれば、ドイツ以外で日本ほどたくさんのドイツ文学研究者を抱えている国はほかにないそうだが、フランス文学などについても似たことがいえるのではないだろうか。いずれにしても、外国の文化にたいしてこれほど関心を示し、大量に消費する国民は史上でもめずらしい存在であろう。

これに戦後の英会話などにたいする一般の関心の高まり、大学進学熱にともなう女子学生を中心とした外国文学系統の学科への進出、国際交流の飛躍的な増大から来る、すでにテレビなどでおなじみとなった同時通訳の華やかな活躍などを考え合わせると、現代の日本はまさに外国語や外国文化の花ざかりといった観を呈している。

たとえ他国の文化であれ、文化を尊重することが文化的というのであれば、今の日本は世界でも有数の文化国ということになり、まことに慶賀すべき事態といえよう。だが、《Les apparences sont trompeuses》のたとえどおり、“メダルの表側”ばかり見ていては実情は把握できない。そこで少しばかり“メダルの裏側” (le revers de la médaille!) ものぞくことにしよう。

すでに触れたように、近代日本の終焉を迎えたということは目標とするモデルがなくなったということであり、同時に西欧化→近代化→進歩という信仰が力を失ったということの意味する。

おそらくはそういった事情を反映して、あまりにあわただしかった外国文化吸収にたいする反省からか、戦後のアメリカも含めた欧米崇拜も冷めたせい、ここ2,3年、外国文化受容にたいする反省を散見する。筆者の目に触れたのは、さきあげた『日本のアメリカ研究』、対話『教育と研究と社会』（ドーア・藤田省三、『みすず』昭和45年6月号）、座談会『ヨーロッパ学者の悲しみ』（雑誌『諸君』昭和46年6月号）その他であるが、ここではその座談会を中心にして、現代日本のヨーロッパ研究の実情を見

ることでしょう。

これは西洋史の会田教授の他、やはり京都大学の3助教授——西洋史、英文学、美学専攻——を混えた座談会であるが、舞台が一般誌という性格もあって、学会やふだんの論文などに見られるよそ行きの姿勢をかなぐりすてた、きわめて卒直な発言が聞かれる。中にはミもフタもないような発言もあるが、たとえ不愉快であっても、それが現状を反映するかぎり目をそむけて通りすぎることは許されないであろう。いずれにしろ、日本のヨーロッパ研究の現状を示す材料の一つとして無視することはできないのであり、それがはらむ問題をあらためて整理し、考えて見るうえで、そしてわれわれのおかれている状況を知るうえで一つの参考にはなると思うのである。

まず、ヨーロッパ研究者の感ずる空しさが指摘される。明治以来、すでに百年も研究歴があるのに相変らず反訳文化とか紹介文化とかいわれる状況がつづき、いつまでたっても一人前になれない。「いつも心の底では、どこか本当には自分たちのものでない対象を扱っているんじゃないかという空しさ、悩みがつきまるとして離れ」ない。専攻が文学の場合でも同じで、英文学ならイギリス人やアメリカ人にとって国文学であるものをやることになり、かりに向うの大学での研究がモデルとすれば、それと同じものは絶対にできっこない。第一に資料の不足、次に言葉のハンディキャップのために。要するに中途半端な資料で、あやふやな外国語を使ってやるからどうしても「まがいのもの」という意識が離れない。その点、実に空しい。「もっとも、そういった空しさとか悩みをまったくお感じでない方がずいぶん多いように見受けられ」る。つまり本国の学者と同じことをやっているつもりでいる。そういう人を見ていると「ますます空しい」。

同じヨーロッパ学といつても、専攻が歴史と文学では様子が違ってくるが、その性格の違いとして、会田教授が「文学青年」にたいする「歴史青年」といったものが欠けているのを指摘しているのはおもしろい。「歴史学のような学問には、趣味的な興味とか、単なる若さだけでは入ってゆけ

ないところがある」。少し醒めていないととっつきにくい。それに対して文学研究者の方は、「文学青年がそのまま大人になったような」ところがある。これは、われわれが以下において外国文学研究というものを考える場合、無視することのできない相当重要なファクターであろう。

ただ、文学の場合でも、ただ楽しいというだけではすまないので研究論文を書く、文学研究ははたして客観的な実証科学たりうるかという根本的な問題があるが（もちろん本国でも）、大ていの人はそのへんに目をつぶって、批評めいたことをやる。ところが、この批評が日本では、本国以上に主観的、印象主義的になりやすい。作品にはそれぞれ、それを成立させた文化的コンテキストがあるが、それに対する無知のせいで、そのための誤解が昔から数え切れないほどあることが指摘される。

これは、まさに筆者が研究以前の問題として注意を喚起したところのものであるが、そういった問題に対する無知か、あるいは手続きを省略して、小説などをちょっと読んだだけの印象で、その国について気楽な断定を下したりすることの危険性——目に見えないだけに大きな——を筆者は最近とくに痛感しているが、この問題はいずれ後で触れる。

ついで、戦後の業績主義、すなわちポストにありつくために論文の点数をそろえなくてはならないといった制度が日本の外国研究を毒し、非常に矮少化したものとして槍玉にあげられているが、これには同感を示す向きも少くないことだろう。

さらに反訳、学術論文をめぐる日本の特殊事情、日本のヨーロッパ学者の相互不信などが論じられている。さて、語学の限界を突破して、ドイツなどに留学してドイツ語で書いた論文を向こうの学術雑誌にのせてもらったとしても、「日本でいえば、高校の先生なのによくやったといわれる程度の評価しかされ」ず、「事実、そんな程度で、その限界を突破できる人はないといってよいほど稀だ」といった事情が紹介されたりもしている。経済力や政治力のみならず、文化力をも背景とした先進国ヨーロッパという、どうにもならない相手を選んでしまった辛さやそこから来る劣等感に

も言及しているが、これなども、わが国のヨーロッパ研究がなかなか一人歩きできない悲しい理由としての的を射た意見であろう。

他方で、研究の過程にあらわれる日本的ゆがみに触れ、ヨーロッパ学をやる場合、はじめから彼我の間に相当距離があることを知っておくべきであり、そういう距離をおいてしか把みえないのだという地点——和辻哲郎や田辺元などがやった地点——に帰るべきだという提言、そして「いままでは、そうでないのかかわらず、ヨーロッパ人と同じレベルに立って研究できるかのごとき幻想があった。またうすうすそのことに気づいていても、そういったポーズを無理してとっていたところに、ヨーロッパ学を学ぶむなしさがあったのではないか」という反省が聞かれる。

それに関連して、「日本のヨーロッパ学者たちは、一体いままで本当のものを受け取ってきたのか」（傍点筆者）という疑問が出されていて、これはさきの「作品の文化的背景に無知なために、作品を自分に都合のいいように解釈して誤解する」という指摘にも関係するが、特筆大書して強調しておかなくてはならないと考える。その極端な例としてアメリカがあげられていて、終戦後、理想的な民主国として、少し誇張していうとまるで地上の楽園のように受け取られていたのは筆者の記憶にもあるが、そのうちにアメリカの悪口をいう方がインテリとして通りがいいというように風の吹きまわしが変わってきた。一体この落差はどこから来るのか。自分がそれまで勝手にアメリカを理想化していただけではないか。

フランスについても、第二次大戦におけるフランス人のレジスタンスは日本では実際以上に買いかぶられ、まるでフランス人が一人残らずレジスタンスに立ち上がったかのようなバカげた神話がねつ造されたのを記憶する人も多いだろう。

フランスといえば「自由、平等、友愛」の国ということになっていて、今日でもフランスの新聞の論説や大統領の記者会見にそういった標語を見出すのはむづかしいことではない。「自由、平等、友愛」の国フランスの政府が、チリのクーデターを前にしていつまでも、沈黙を守っていい

のか、という風に。そういう思想が出てきたということ自体は高く評価すべきであり、フランス人がそれにプライドを持つのは自由であるが、外国人までがそれを額面どおり受け取り、フランスの現実そのものと思ひ込んだりするととんでもない過ちを犯すことになる。それが、筆者がとくに、パリ・コミュニケーションを描いた大仏次郎の小説『パリ燃ゆ』などを読んで、今さらのようにフランスがブルジョア国家であることを確認して抱いた感想である。今ごろ気がついたかと笑われそうだが、それが筆者一人だけのことであったとしたら幸いである。

たしかに、この座談会で反省されているように、この1世紀のヨーロッパ学の歴史は、一面において「イギリスではこうだ」、「フランスではああだ」、「ソ連では……」、「しかるに日本では……」とロクに事実を確かめもせず、相手国に勝手に自分の好みのイメージを押しつけて、そこから独善的な結論を引き出してきた歴史とすることができるだろう。さきにあげた『ことばと文化』の著者のことばを借りると、そういった傾向は「殆んど現在の日本人の骨の髄まで浸透しているように思われる。客観的である筈の学問でさえ、この傾向から脱しているとは言えないのだ」。

以上、かなりのスペースを割いて座談会を通して、日本のヨーロッパ研究の現状を眺めてきたが、細部において異論はあっても、全体として事実を反映していることはたしかであろう。そして、そこにはっきりと指摘できるのは日本のヨーロッパ学の根無草的性格である。

いうまでもなく、われわれはヨーロッパからは地球の裏側にあたるようなところでヨーロッパを研究するという地理的、歴史的制約から来るさまざまな困難にとりまかれており、それにもかかわらずある成果をあげてきたし、また個々には少数のすぐれた仕事があるのを認めるのにやぶさかではないが、全体として見た場合、さきに触れた英語の入試問題ではないが、莫大なエネルギーの空まわりといった空しさが感じられはしないだろうか。

つぎに、そういった、いわば“不毛性”を招いた日本の特殊状況について考えて見よう。

2

(i)

日本文化の特殊性というのは、孤立した島国であり、とくに欧米からは地域的には遠く離れていて、そこで一つの小さな特殊世界を作りあげてきたということにあらう。そして外国文化の吸収のしかたもまた特殊であった。日本の研究の特殊状況を論ずるにあたって、あらためてこの事実を確認しておいた方がよいように思われる。

人類学者の増田義郎は、いわゆる“会話”について論じ、日本人がしゃべるのが下手なのは日本がノンキで平和な国だからだという。だいたい外国文化の受容とか摂取とかいういい方自体、すでに日本的なので、余裕があった証拠である。日本以外のところでは、外国文化などというものは、侵略者や支配者が泥靴でどンドン踏みこみ、無理を押しつけ、税金は取る、人間は徴発する、女に手をつけると同時に強制し、また強制されたりすのが常識だが、それに反してわが国日本では、外国に支配されず、また侵略もされずにできあがった文化だけはふんだんに中国やヨーロッパから取り入れることができたのであった。だから外国語を外から強制されることもなかったので、とくにしゃべる必要もなかったし、今もしゃべれないのである。というのがその意見である¹⁾。

筆者はこの意見が正しいと考える。「日本の近代化そして西洋化という一大文化変容が、大量の人間の移動を伴う征服や移民という文化変容の定石をふまず、ひたすら「ものど文献」という人間の直接的接触をできる限り捨象した極めて例外的な形で行われてきただけに、ことばにたより切った外来文化受容の問題は、言語学の避けて通ることができない重要な問題である」²⁾ (傍点筆者) というのも同じことを別のことばでいい表したものであらう。

1) 増田義郎『しゃべる必要・不必要』。(『私の外国語』中公新書、184～186ページ)。

2) 鈴木孝夫『ことばと文化』(岩波新書、110ページ)。

要するに、日本とは、他の国民のように侵略者に家を焼かれたり、財産を没収されたり、女房や娘を強姦されたあげくにその文化を押しつけられるというひどい目にあわずにすんだ、まことにありがたい国であり、そしてそこに日本人の外国文化に対する姿勢のすべてがあるといつてよい。もちろんそれにはプラスとマイナスがあるが、イギリスの社会学者ドーアは、さきに触れた対談の中で、そのことについてきわめて示唆に富む意見を述べている。³⁾

日本で、明治時代に大学が作られてあらゆる学問が日本語化されたことを、英語が使われるインドの大学と比較して、ドーアは日本にとってプラスだったという。英語を使うから言語的には英米の大学と同じ世界に住むことになり、インドの学者の業績は英米の大学の業績と常に比較される。インド人でも、西欧の知的文化を三代ぐらいつづいて吸収している家庭に育った人間は別として、一代ぐらいで学者になった人間は、どんなに優秀でも欧米人とは対等に競争できるはずはない。しかし、同じ言語世界に住んでいるということから何につけ比較され、劣等感を感じてみじめである。

それに反して、日本ではとにかくすべてを日本語化して、日本語という岩壁を島国のまわりにめぐらして、その壁の中で自分たちの学問を作り上げて行った。これがプラスの面である。そのかわり、マイナス面としては、外の世界と直接交渉を持つことがなくなり、言語的弾力性、および文化的弾力性が失われたとする。

これは、日本の学問のおかれた特殊な状況を説明するものとして、きわめて貴重な観点を提供してくれるものといえるだろう。

ところで、このように日本語の垣を周囲にはりめぐらした中で、西洋化という一大文化革命を人間の相互の接触抜きに、ひたすら「ものと文献」という極めて例外的な形でおこなったのは、研究の面にどう反映しているか。

明治初期、近代国家をきずくにあってヨーロッパに仰いだ実学——法

3) 雑誌『みすず』(昭和45年6月号, 9~10ページ)。

律、軍事、医学——は別として、わが国のヨーロッパに対する立場は、当然のことながら教養主義のそれであって、文学、芸術を中心とするものであった。政治的、経済的には直接の利害関係がとほしいからある意味では当然であるが、ヨーロッパを努力目標と考え、その文化をすでにでき上ったものとして押しいただくものではあっても、ヨーロッパを全体として捉え、その核心に肉薄するという性格にはとほしかつたといわねばなるまい。

この教養主義は、その後旧制高校での語学——それも文学に偏った——を通じ、新制大学へと受けつがれ、今のヨーロッパ学にも色濃くその影を落しているようである。その洗礼を受けた人間とはいかなる人物であるのか。さきに引用した人類学の増田教授はアメリカのエアリア・スタディと比較して次のように描き出している。

日本の場合⁴⁾は違う。この狭い島国の中にとちこもり、ドイツ語も話さず、ドイツの民衆も知らず、ドイツの学者に友人もなく、しかも万巻の書を読んで、ドイツ革命思想研究家などと平気で自称できる社会である。いきおい学問は抽象的になり、対象は空想化される。べつにドイツに限らず、フランスでもイギリスでもそのようなかたちで研究できるようになっているので、これはアメリカあたりと大したちがいだと思うのである⁴⁾ (傍点筆者)。

このようにして何一つ具体的に知らず、知ろうともせず、「暗い書齋にとちこもってひたすら抽象的に、外国の“思想”や“政治”を研究する型の学者」が作り出されたわけであるが、いずれにしるこのように「イギリス」抜きイギリス研究、「フランス」抜きのフランス研究が横行するにいたった。現にあるフランス文学専攻者は、ヨーロッパ文化そしてフランスについて論じながら、つい本音が出たのか、奇怪にも「私はヨーロッパについて知らない。フランスについてさえ知らない。……」と告白してい

4) 『しゃべる必要・不必要』。前掲書191ページ。

る⁵⁾。もちろん文字通り受け取る必要はないが、それにしても、フランスについて知らないフランス文学研究者とは、ああ！

しかし、かつて、前大戦末期に世界経済調査会で、敵国の『ベヴァリッジ・リポート』に関する報告書の作成に従事したことのあるという、ある英文学者の述懐ほど、日本のいわゆる外国文学研究の正体を明かにするものはないだろう。

とにかく、英文学研究も大切だが、英国を知らない英文学研究などというものがまことに心細い哀れなものだと悟ったのはこうした道草のおかげだった。もちろん、文学というものには超時代性、超国境性というものがある、それなればこそ、外国人である私たちにも英文学研究ということが考えられるのだが、それにしても、日本の英文科なるものはあまりにも英国研究をおろそかにしていやしないか。戦後、雨後のたけのこのように群生したわが国の英文科は、英語と英文学とはとにかくとして“英国”はたいてい不在のようである。また英文科以外に、日本には英国研究に従事している歴史学者、哲学者、経済学者などけつして皆無とは言えないのだが、わが英文学の徒は、たいていの場合、そうした人たちとも没交渉な世界で、彼らの“英文学”を愛玩愛撫しているにすぎないのだという感じがする。一人の人間がすべてに及んで何もかも勉強することは不可能なのだから、せめて、英国というところに共通の場を見出して、哲学者も経済学者も歴史学者も文学者も、お互いにもっと実りの多い交流を計ったらどんなものであろうか。英文学研究も大切だが、英国研究ともっと結びついた英文学研究を推進しなくてはならない⁶⁾ (傍点筆者)。

自分たちだけの“英文学”を盆栽かなんかのように「愛玩愛撫している

-
- 5) 多田道太郎『文化の個別的考察・ヨーロッパ文化』。(岩波講座・哲学シリーズ『文化』, 145ページ)。
 6) 早坂忠『英語教育とイギリス研究』に引用。(雑誌『英語教育』昭和48年12月号, 9ページ)。

にすぎない」とはなかなかうがった表現だが、仏独など他の外国文学についても事情は変わらないといえ、あやまりだろうか。

以上、日本のヨーロッパ学の根無し草の性格を追って閉鎖的な教養主義の末路にまでたどりついたわけだが、ごく簡単なスケッチながら、ヨーロッパ研究が対象を正確に認識しようとするどころか、その対象が不在のまま、それを勝手に抽象化し、空想化し、理想化し、あるいは趣味化してきたということが多少とも明かになったのではないかと考える。

一方、好むと好まざるにかかわらずヨーロッパ研究とヨーロッパ語教育が主力を大学の文学部に仰いでいる現状では、大なり小なり今指摘した教養主義の影響を受けざるを得ないということは別としても、ヨーロッパ学といってもそれは実は文学研究あるいは語学研究という特殊な分野にとどまっていることを確認しておいてよいだろう。そして、筆者もその末席につらなる一人として、たとえヨーロッパ研究そしてフランス研究が日本にとって必要だとしても、小説の研究以外に、その国の文化に迫る基礎研究の必要を痛感していることを付記しておきたい。

さて、日本独特の教養主義が奇怪な研究者タイプを生み出し、それがヨーロッパ研究に与えた影響について論じて来たが、今や教養主義の破産はだれの目にも明かであろう。そしてそこから生ずる結論も明かであろう。筆者は、はじめに紹介したヨーロッパ学者の“空しさ”や根無し草の性格を少しでも感じなくてすむようにしたいと思い、まずはせめて足元のフランス語からでもと考えているだけで、べつに大それた提言なぞする気もなくまた持ち合わせてもないが、将来のわれわれの方向が、過去におけるように対象とする外国の文化の一部を趣味的に切り取って愛玩する——主観的意図はともかく、客観的に見て——のではなく、それを必ず全体の一環として位置づけ、その上で具体的、立体的かつダイナミックに考究するものでなくてはならないということだけはいえると思う。その意味で、「研究対象そのものが不在状態で、外国研究、学問研究を行えるというこの現状は改むべきだ」と思う。先進国のありがたいものを押し頂くという卑屈な

気持ではなく、イギリスでもフランスでも研究する場合、どんどんエアリア・スタディ的な態度をとり入れ、明治以来の抽象的・理想化的ヨーロッパ研究を早く御破算にすべきではなからうか」という増田教授の提案にまったく賛成するものであることを明かにして、次の問題に移ることにしよう。

(ii)

さきに紹介したように、社会学者ドーアは日本が開国にあたって、日本語で独自の城を築きあげたのを——インドなどと比較して——プラスと評価しているが、マイナス面として、それによって言語的、文化的弾力性が失われたことを指摘している。文化的弾力性の喪失については上で論じたので、ここでは言語的弾力性のそれについて若干触れてみることにする。いうまでもなく、その問題を万遍なく扱う用意も能力もないので、一二、基本的に重要と思われることを取り上げるにとどめよう。

さて、外国語は外国研究のカナメとして重要だが、明治以来、ただ西欧の文物を吸収するに急であったわが国では、外国語を学ぶこと自体がすでに善と考えられ、その意味や方法についてはたいして深く考えられてこなかったといっていいただろう。そして英語は申すにおよばず、他の外国語にもあいかわらず——時たまその有用性について疑問がなげかけられることがあるが——おびただしい時間とエネルギーが捧げられているが、その場合の論拠として持ち出される議論には一定のパターンがあるようである。「英語ぐらい必要だ」という単純なものから、「国際人としてやって行くには、日本語以外に外国語を通して複眼の思考を学ぶべきだ」、「外国語を通して日本語を再認識する必要がある」等々。最初に触れた対談『なぜフランス語を学ぶか』でも同じような議論が見られる。

それらは表現は違っても、「コミュニケーションのため」というのは当然として、それに劣らず「外国語は教養として必要だ」という教養主義の立場に立つものであろう。さきに批判の対象とした教養主義は、この分野

でも依然として支配的なのである。ただし、筆者はそういった議論そのものには決して異論をとらえるものではない。プリンシプルとしては反対のしようもない立派なものだから。ただ個人として、また教師としての経験から、そこにダイナミックな言語現実との重大なズレがあることに気がついてから、その種の議論にはウンザリするようになった。そのズレとは何か？

英語学の市河三喜博士が、日本人が外国語を不得意とする理由として、①日本語がヨーロッパ語とおよそ異質な言語であること、②たとえ習得しても島国のため使う機会がないこと、③どちらかといえば人見知りし、消極的な国民性の三点をあげていることをどこかで読んで記憶していたが、その後、現在にいたる経験から、筆者は日本人が西欧の言語を習得する上で最悪の条件におかれているのではないかと思うようになった。以上の三点は、よく考えて見るといづれも学習にとって容易ならざる条件であり、これを克服しようとするとなみなみならぬ覚悟と努力を必要とするのである。

1970年にアメリカの「アジア学会」が出版した『アメリカにおける日本研究』という公的なレポートによると、アメリカの日本研究者が日本語を習得するのに、フランス語を習得する場合よりもふつう6倍の時間がかかるとい¹⁾。『ポーランドにおける日本文学』という紹介では、「とにかく海外で日本文学を研究する事はやさしい事ではない」とその困難を訴え、日本語がきわめて難解な言語であるとして、「まず日本語をマスターするためには、英語などより少くとも2,3ばいの時間と努力が必要である」(傍点筆者)と述べられている²⁾。「6倍」と「すくなくとも2,3ばい」とでは少し違いますが、この際それはどうでもいいことであろう。西洋人が日

1) 志村嘉一『危機に立つ米国の日本研究』。(『エコノミスト』昭和48年2月6日号、78ページ)。

2) M.メラノヴィッチ『ポーランドにおける日本文学』。(『文学』岩波書店・昭和48年5月号、104ページ)。

本語を習得するのに、他のヨーロッパの言語よりも数倍の時間とエネルギーを必要としていることだけは確実である。これは、裏をかえせば、われわれ日本人が英語なりフランス語を学ぶ場合、西洋人がそれらのことばを学ぶ時よりも実に数倍(!)の時間とエネルギーがかかるということを意味するのだ。

2倍というだけでもこれは大変な数字である。2倍の収入がある、2倍の広さの家に住むなどと考えただけでもそれは明かであろう。それが数倍の時間とエネルギーということになると、筆者などには、実に気が遠くなるような数字に思われる。『2つの文化と科学革命』などで日本で有名なC.P.スノーは、「2つの文化」を解消させるための努力との関連で、スカンジナビヤ人が「外国語に法外な時間を割かねばならないという実際上の必要によってハンディキャップをうけている」と述べているが、この日本人のハンディキャップを知ったなら、きっと目をまわしたことであろう。

このように、われわれ日本人にとっての、外国語学習の異常な困難というのが実情であり、この困難を前にして、多少の好奇心や中途半端な教養主義などどこかへ消しとんでしまうように思われるがどうであろうか。このような基本的事実にもかかわらず、楽天的な教養主義がまかり通って来たのは、日本の学者がダイナミックな言語現実におおむねうとく、もっぱら書物というスタチックな——それだけに抵抗の少い——手段にたよってきたためと筆者は考えている。以上に指摘したのはほんの一例にすぎないが、いずれにしろ、対西欧との関係が一つの転機を迎えている現在、何よりもまず、言語現実に即した外国語にたいするアプローチを考え直す必要があるように思われるのである。

以上の考察からも明らかに見られるような傾向は、当然他の分野にも影響が及ばないはずはない。とくにことばと直接の関係を持つ外国文学の研究においてそれが明瞭に見られるはずだが、あまり熟さずまとももない考えをつらねるかわりに、この問題を「言語と思考の関係」として捉え、「これまでとかく見すごされてきた」この問題について、短いが重要な議

論を提起している文章を紹介しておこう。『朝日ジャーナル』（73年3月16日号）の「文化ジャーナル」の「ことば」欄に掲載された一文がそれで、数年前まずフランス語で書いてフランスで出版されて評判を取り、ついで作者が日本語になおして出版した小説『雪は湿っていた』（J・ミネカイズカ）と、日本語と朝鮮語の作家金史良を例に引いて論じ、「言語は思考を表現する手段と見なして疑わなかったわが国一般の考え方とは逆に、思考を決定するものが言語であり、しかも個々の言語はけっしてぴったり重なりあうものではないという事実」を指摘しているがこれも同じ反省の上に立ったものであろう。そして「従来とかく国籍や民族によって区別されてきた国民性ないし民族性といった問題も、いまあらためて言語の問題として考えなおさなければならないのではなからうか」と問うているが、まったくわが意を得た問題提起としてただ同感の意を表す他はないことをしるしておこう。

3

冒頭に、この機会に「日本人のヨーロッパに対するアプローチを根本的に検討する」と謳ったわりには、表面をなでる程度に終わってしまった気がするが、筆者にとっては、比較文体論を押し進めて行く段階で、どうしても必要な作業だったのである。比較文体論が結局は比較文化論であることは最初にも述べたが、それに照らして考えると、実はヨーロッパ学以前の問題が多々あることに気がつき、そのことがむしろに気になり、いかなる形であれ、自分の足元を振り返る意味でぜひとも論じておく必要があったのであった。

そしてその試みに大して成功したとも思えないが、日本のわれわれがおかれている特殊な研究状況というものも多少でも明かにできたとすればうれしいことである。

近代日本のおかれた状況は、たしかにユニークなものであった。島国という特殊な地理的条件を利用し、日本語の壁をぐるりと張りめぐらし、小

さいが独自の文化圏を作りあげたということに対して評価はいろいろ考えられようが、ドーアのいうとおり、インドのように英語圏、あるいはフランス語圏といった高度の文化を有する大言語圏に引き入れられていたとすれば、大方のインドの学者のように絶えずきびしい比較の目にさらされて劣等感に悩まされたことは確実であり、その点われわれは運命に感謝すべきなのだろう。ただし、そのマイナス面も、すでに見たように明かである。

日本の特殊状況とは、いいかえれば外国の直接侵略を受けることなく、その文化の高度の成果だけはふんだんに受け取って来た、つまり外国の文化をその創造者や担い手から切り離して真空の中で受け取ってきたということだが、強味である日本語の壁も、あまりそれに頼りすぎると対象を自分の都合のいいように受け取り、ひとりよがりな——一步国外に出れば通用しない——議論におぼれる危険性をはらんでいるがそれはすでに見た通りである。

要するに、問題はいっさいの日本語化とともに失われた言語的、文化的弾力を回復することだが、それはいうまでもなく口でいうほど簡単なことではない。再三触れた『ことばと文化』の著者は、動物に対する残酷さを日本とイギリスで比較して「ことばに意味を与える価値体系の違いを無視して、ただ西歐文明、泰西文化の枠組でのみ有効性を持つ各種の概念を、日本語に直訳し、極めて安易な形で彼我の優劣を論じるといった態度がいまだに跡を断たない」（傍点筆者）ことに不満を表明し、「これだけ長く、これだけ深くヨーロッパを研究したつもりでいる日本人が何故こんなことをとすることが余りにも多すぎるのである。外国のことばは辞書と文法書があれば分ると思うのは大間違いである。「cruelty は『残酷』という意味だ」式の知識からは百害あって一利もない結果しか望めない」と云っても過言ではない」と述べているが、これはすでに論じたように「イギリス抜き」のイギリス研究、「フランス抜き」のフランス研究の当然の帰結だとしても、すでにヨーロッパ研究も1世紀を経た今、そういう態度を少しづ

つでも清算してゆくことぐらいはできるし、またしなくてはならないと考える。

最後に、ヨーロッパ研究は主として大学で行われているという意味で、それは同時に大学論ともいえるだろう。こういうことをいうのも、最近、名著『ヒトラー』で日本にも知られている歴史学者アラン・バロック——目下オックスフォード大学副総長——の『大学教育とは何か』と題する『オブザーヴァー』紙とのインタビューの抄訳を『朝日ジャーナル』紙（昭和49年2月1日号）で見つけ、現代イギリスの大学が抱える、日本とも共通する問題に関するこの歴史学者の考えを興味深く読み、いろいろ考えさせられたからだが、最後に「今日の大学に期待してよいもの」という質問に答えている部分に強い感銘を受けたのであった。バロックは「私自身は、大学および大学教育が国に対して持つ価値は、生産性だとかその他の管理的表現では計れないものだと思う」と前置きをして、しかし次のようにいう。

しかし同時に、私は大学があぐらをかいて社会に理解されるのはあたり前だという顔をしているのは間違いだと考えている。私が閣僚や当局者と話していて本当に悲しく思ったのは、人々が、大学に対してもっと効率よく仕事したらどうかと圧力をかけたことではなくて——これはまったく正当な批判だと思うし、われわれはこの種の圧力をかけてもらう必要さえある——そもそもわれわれの仕事に価値があるのだろうかと彼らが疑っているように見えたことである。

従って、私は大学が自ら考える大学教育と研究の価値をはっきりのべるべきだと思う。そして黙っていることによって、その立場——自らの住む社会に関心をもつものならだれにとっても重要なものだと思うが——を欠席裁判によって裁かれるようなことがあってはならない。

日本とは違ってはるかに深い大学の伝統をほこるイギリスにそんなことがあるとは思ってもよらなかったのが少からず驚かされたのだが、これを読

んで筆者は今さらのように自分の仕事について考えずにはいられなかった。ヨーロッパ研究の価値とはいったい何か。ヨーロッパ学者の感ずる“空しさ”をわれわれは初めの座談会で見たばかりである。

いずれにしろ、バロックの警告は、「学問」とか「研究」とか名前さえつけばそれだけで価値があり、社会も認めてくれるはずだという考えがいかに甘ったれたものであるかということを引きしくいませめたものと考えるが、今のところ、筆者は漠然とながら、研究の価値は——直接であれ間接であれ——何らかの形で社会と結びつくところにしか生れないであろうと考えていることをしるすにとどめ、筆をおくことにする。

(なお、『仏独比較文体論』は次の関西大学『文学論集』に紹介論評する予定である。)